國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕目安箱は民衆の意見を政治に反映させたのか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 根岸, 茂夫, Negishi, Shigeo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000595

目安箱は民衆の意見を政治に反映させたのか

根岸茂夫

長年、日本時代史で近世史の概説を担当してきたが、毎年学生が大きな反応を見せるのが、享保の改革の目安箱設置についての話である。高校の教科書はじめ多くの書物や近世の概説書が、庶民の意見を政治に反映させた政策として描いているが、実はそうではないという話をすると、学生たちは様々な反応を示す。

私は、目安箱は庶民の意見を聞くという将軍のアピールであって、目安箱に投書された意見はほとんどが黙殺され、焼き捨てられており、庶民の意見のほとんどは政治に反映されてはいなかったと長年話している。目安箱へは膨大な投書があったが、実現された政策が小石川養生所の設置以外にどれほどあるだろうか。高校教科書にはこの事例だけしか挙げておらず、それ以外に管見の限り数例しか知らない。一方で、目安箱に投書したために処罰を受けた例はしばしば見受けられる。

享保六年（一八二一）七月に発布された目安箱設置触書について、目安箱の設置だけが多くの研究概説では評価され、触書が出た背景を論じたものは少ない。触書の冒頭には、「近頃、所々において名前や住所が不明な者の捨て文があり、なかには法外なことが書かれていたりする。」とあり、捨て文の多さを問題にしている。捨て文とは、政治や役人の批判を記し役所の門前などに捨てておく文書で、なかには貼り札といって役所の門や壁に貼り付けておく挑発的な行為もあった。この状況に対応して、目安箱を設置するから今後捨て文は無視すると、触書は記している。つまり目安箱の設置は将軍吉宗の思い付きではなく、捨て文など政治批判の増大に対応したものであったが、概説や教科書などはこのことが無視されている。

幕府は、どのような内容を投書させようとしたのか。触書には、第一に幕政上の利益になる意見、第二に役人の非分の密告、第三に訴訟の審理が役人の怠惰によって遅延している実情、を投書するようにと奨励し、一方で自分の利欲や遺恨を晴らす目的、支配役所への出願以前の事案や裁判が進行中の紛争、流言虚説を上申することは禁じている。

ここから見えてくるのは、捨て文の内容が、役人たちの施政に対する非難や、裁判の停滞・裁許に対する不満が多かったことである。そのような投書を奨励しているのは、幕府としては役人たちの施政の実情を把握したかったのだろう。

禁止されている内容も、捨て文の中には多かったはずである。江戸幕府評定所が刑事裁判の類例を分類抄録した『御仕置類例集』に、目安箱の投書で処罰された例が掲載されているが、すべて触書に禁止されている事項に関わったものである。

すなわち目安箱は、政治批判が高まる中で、特に庶民との接点に当たる実務担当の役人たちの情報を集めようとし、一方で直訴の一部を認めながら民衆の不満をガス抜きしたものであり、政策の提案は建前に過ぎなかった。だから民衆からの政策の提案で実現したものはほとんどなかったのである。役人たちへの不満を知ることは、何よりも役人の支配統制に有用である。吉宗が直属の隠密として設置した御庭番の調査の多くが、役人たちの素行調査であったことは、深井雅海氏の研究で知られているが、役人の情報を収集することは、支配者にとって不可欠であった。

ただ享保改革期初期に年貢増徴など支配を強化させているのは、吉宗および幕府の政策である。その支配の強化が実務層の役人を通じて民衆を抑圧し、民衆の不満や批判が役人たちに向かっていた。民衆の不満などを目安箱によって情報収集しながら、さらに役人たちに対する統制を強化し、あるいは処罰して、さらに支配を強め専制権力を確立していったのが吉宗の政策であった。一方で、実務役人に責任と民衆の不満を押し付けながら、民衆に対して正義の味方として将軍がはるか上に存在する姿を見せつけたのが、徳川吉宗の目安箱設置だったのである。

いまでも自治体の首長や経営者が、目安箱と称して広く意見を聞く例を見る事があるが、果たして意見は聞き届けられているのだろうか。

（日本近世史）